

## ハイダ語の形態統語法に関する包括的記述研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2014-02-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/7533">http://hdl.handle.net/10297/7533</a>

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月4日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520429

研究課題名（和文） ハイダ語の形態統語法に関する包括的記述研究

研究課題名（英文） Documentation of Haida morphosyntax

研究代表者

堀 博文（HORI HIROFUMI）

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：10283326

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、カナダ北西海岸地域のハイダ島（クィーン・シャーロット諸島）とアメリカ合衆国アラスカ州で話されるハイダ語の文法記述を主たる目標とするものである。ハイダ語が話される地域に定期的に赴いて調査を行ない、動作で用いられる道具を表わす要素や使役の要素についてそれぞれの機能を明らかにした。また、動詞の形成に焦点を当て、それに関わる要素のふるまいや動詞に付加される順序について考察を加えた。

研究成果の概要（英文）：

This project aims to gain a comprehensive understanding of the Haida language, one of the First Nations languages spoken in Haida Gwaii (or the Queen Charlotte Islands) off the northwest coast of British Columbia in Canada. The project, mainly focusing on the morphosyntax of Haida, clarifies some of the verbal elements which are relevant to transitivity such as instrumental prefixes and causative affixes. It also reexamines if the term “polysynthesis” can be applicable to Haida, and concludes that the language should not be characterized as polysynthetic in the proper sense of the term, based on the fact that the number of morphemes per word is constrained by semantic factors as well as by the present-day speakers’ preference for analytic expression to synthetic one.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ハイダ語、北米先住民諸語、言語類型論、記述言語学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題の研究対象であるハイダ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西海岸地域のハイダ島（クィーン・シャーロット諸島）とアメリカ合衆国アラスカ州南東部で話される系統不明の言語である。その話者

は、多くが70代以上のごく少数の高齢者に限られ、しかも全員が英語との二言語併用者であることから、現在の話者がハイダ語の話せる最後の世代であるとみられる。特に本課題で中心的に研究してきたスキドゲイト方言（カナダのハイダ島で話される）に限って

みれば、流暢に話せる話者は大体 10 名前後であり、そのほとんどが 70 代後半から 80 代の高齢者である。

これまでなされたハイダ語の記述研究をみると、まず 20 世紀初頭の民族学者スワントン (John R. Swanton) による文法概説 (Swanton 1911, *Haida*)、テキスト (Swanton 1905, *Haida texts and myths*) などがある。いずれもハイダ語が日常の言語として機能していた時代の姿を捉えたものとして極めて貴重な記述であるものの、音声表記が不正確である上に、文法の記述も多く誤った分析が含まれるなど、記述の質はあまり高くない。

その後、散発的な研究はあったが、ハイダ語の全体的な姿を記述しようとする研究はなく、近年になってエンリコ (John J. Enrico) によって、文法書 (Enrico 2003, *Haida syntax*) や辞書 (Enrico 2005, *Haida dictionary: Skidegate, Masset, Alaskan dialects*) が出版されるに及び、ようやく密度の高い記述が得られるようになった。エンリコの記述は、スワントンのそれに比べるべくもないほどに質の高いものであるが、そこに提示されているハイダ語の姿は、現在の話者の一世代前のそれであり、現代の話者の話すハイダ語の実態であるとは言いがたいなど、やはりいくつかの問題点を含んでいる。

こうした現状を踏まえ、本研究課題の代表者は、ハイダ語のスキドゲイト方言を主たる研究対象として、音韻法と形態統語法の記述を継続的に行なってきた。音韻法では主に声調の音声的な実現が音節構造と密接な関係にあることを指摘し、また、形態法では、とりわけ複雑な構造をなす動詞の形成に関わる接辞の種類と機能の闡明に努めた。更に、言語類型論的な視点からハイダ語の特徴を考察し、分けてもハイダ語が有する分裂自動詞性が動詞の意味特徴によって記述できる点を明らかにした。

これまで上述のような成果が得られたが、いまだ十分な分析がなされていない言語事実が多く残されているのも実情である。例えば、形態法に関していえば、時に「複統合的 polysynthetic」言語といわれるハイダ語をどのように特徴付けるかという点に関しては、これまで考察が不十分であった。また、統語法に関して、取り組むべき課題が多い。

このような事情を背景に、ハイダ語のそれぞれのレベルにおける記述と理解を深化させるべく本研究課題が計画された。

## 2. 研究の目的

上に述べたような背景をもとに、ハイダ語文法の包括的な記述に向けた取り組みへのひとつの足がかりとして本研究課題を位置づけ、主に形態統語面に焦点をあてて研究を

行なった。その主な目的をあげれば次の通りである。

- ① ハイダ語における他動性の問題
- ② ハイダ語の「複統合性」の再検討
- ③ 統語法、とりわけ複文構造と関係節構造の解明を図るべく、その基礎資料となり得る自由発話 (テキスト) を蒐集する。
- ④ 過去になされたハイダ語の資料の整理
- ⑤ 本課題で得た成果を現地のハイダ語教育に還元する。

## 3. 研究の方法

上述の目的を達成するには、ハイダ語の実像を得るべく現地調査を行なわなくてはならない。調査は、研究期間の毎年度、大体 1 ヶ月程度、ハイダ語が話されるカナダのハイダ島スキドゲイトに滞在し、話者数名の協力を得て、ハイダ語の文法記述と分析、テキストの蒐集と分析を主に行なった。文法記述にあたっては、質問応答方式を主たる手段としたが、話者の自由発話であるテキストの分析結果も重視した。また、蒐集したテキストは、今後の研究の基礎資料とし得るよう、データベース化を図った。

更に、現地調査以外にも、ハイダ語の構造的な変化を探るために、20 世紀初頭になされた記述 (上述参照) の整理を行なった。

## 4. 研究成果

### (1) 本研究課題の成果と意義

#### ① ハイダ語の他動性に関する考察

ハイダ語の他動性に関わる諸要素のうち、特に動詞の結合価をあげるために多用されるものとして、手段接頭辞と使役接辞がある。

手段接頭辞は、動詞に付加され、その動詞が表わす動作を遂行するために用いられる手段 (例:「蹴ることによって」「引くことによって」など) や道具 (例:「耳で」「ボートで」など) を表わす要素である。その一部は、名詞に由来するものであり、その点においていわゆる名詞抱合との関連性が指摘され、一方、動詞に由来するものは、複合動詞との関連性が想定される。手段接頭辞は、すべての動詞に付加されるわけではない。ただ、手段接頭辞の中には、かなり多くの動詞に付加され得るものから、ごく限られた数の動詞にしか付かないものまであり、その自在性は様々である。

統語論的な特徴をみると、手段接頭辞は、2 項動詞に付加された場合には、動詞の結合価をかえないが、1 項動詞に付加されると、動詞の結合価をかえる場合とかえない場合がある。これは、手段接頭辞がその対象への働きかけを含意するか否かによるものであり、対象への働きかけを含意する手段接頭

辞は、1 項動詞に付加された場合、動詞の結合価を一つ増やし、2 項動詞を派生する(例: 手段接頭辞「撃つことによって」+1 項動詞「死ぬ」→「撃つことによって殺す(死なせる)」)。

手段接頭辞の中には動詞の結合価を増やすものがあることはこれまで指摘されていたが、それが対象への働きかけを含意するものに限られることを指摘した点は、本研究の意義のひとつであるといえよう。

一方、使役接辞に関していえば、ハイダ語には、二種類の使役接頭辞と一種類の使役接尾辞がある。これら三種類の使役接辞の違いは、主に付加される動詞の結合価や使役者と被使役者の有生性、表わされる使役の直接性と間接性、動詞における[動作性]や[制御性]という意味特徴の有無、使役語幹(すなわち、使役接辞によって派生された動詞語幹)の語彙化の程度にある。二種類ある使役接頭辞のうち一つは、手段接頭辞「手で」に由来するものであり、本来の意味が薄れつつありながらも、2 項動詞には付加されないという手段接頭辞の特徴が保たれている。

ハイダ語において複数みられる使役接辞については、付加される動詞の結合価の制約や直接使役と間接使役の違いがあることは指摘されていたが、それらの接辞の選択に動詞の意味特徴が関わっていることを指摘したのは重要である。更に、これらの意味特徴は、ハイダ語の有する分裂自動詞性に関与するところから、他動性と分裂自動詞性を関連付けるひとつの可能性を捉えたといえる。

## ② ハイダ語における複統合性の再検討

ハイダ語は、一つの語に多くの形態素が盛り込めるといって複統合的な言語であるといわれ、とりわけ動詞は、その形成に関わる接辞の種類が多く、複雑な構造を有する複合体を作ることがある。しかし、話者による自由発話をみる限り、実は、複統合的と称するに十分といえるほど複雑な動詞が現われることはむしろまれであり、一つの動詞に盛り込まれる形態素の数でいえば、せいぜい4 つから6 つ程度で、それ以上の形態素が一つの動詞に現われることはあまり多くない。いわば何らかの要因により、一つの動詞に現われ得る形態素の数が制限されているといえる。

ハイダ語の動詞接辞の承接順序についてみると、接頭辞は比較的順序が固定されているものの、接尾辞は順序が固定されている語尾(主にテンス・アスペクト・ムードを担う)と順序がゆるやかな派生接尾辞に分けられる。つまり、語尾はスロットによって決められているのに対し、派生接尾辞はスロットが定まっておらず、その承接順序は、いわば意味的な要因が関与していると考えられる。実際、派生接尾辞は、場所・方向・位置

や状態の変化、程度、意志など他の言語では自立語で表わされるような具体的な概念をもつものが多く、その意味的な制約から一つの語に共起し得る接尾辞が限られていると考えられる。言い換えれば、意味的な制約により、一つの動詞に付加され得る接辞の数が限られてくる、すなわち、統合度が低くなっているといえる。

また、多くの派生接尾辞が具体的な概念を有するという事は、それと同等の概念を表わす自立語に置き換えられることを意味する。すなわち、同じ出来事を表わす文でも、派生接尾辞を使って統合的に表現する場合と自立語を使って分析的に表現する場合の二通りある。そのいずれを使うかによって表現上の差異があり得るが、現在の話者が多用するのは分析的な表現の方であり、派生接尾辞を使った統合的な表現を用いることは少ない。すなわち、派生接尾辞の使用を避けるということは、とりもなおさず、動詞に付加される派生接尾辞の数が減ることを意味し、結果的に統合度を下げることにつながる。これは、おそらく話者のハイダ語の運用能力に関連していると推測される。すなわち、運用能力の高い話者ほど、より複雑な構造をもつ動詞を作り出すことができるのに対し、運用能力の低い話者は、分析的な表現に頼る傾向にあるといえる。

これまでハイダ語が複統合的な言語であると特徴付けられてきたものの、実際にハイダ語において複統合性がどのように顕現するのか、あるいは、果たしてそのような特徴付けが正当なのかどうかについては、ほとんど言及されることがなかった。本研究課題は、ハイダ語における複統合性を捉え直し、それがかなり限定的であることを指摘するとともに、その要因を明らかにし得た点が成果のひとつである。また、こうして得られた知見は、言語類型論でいうところの複統合性に関して再検討を迫るものであるといえる。

## ③ ハイダ語の統語法について

ハイダ語の統語面に関しては、理解が不十分などところがあるが、その基礎資料となるテキストの蒐集と分析を重点的に行なった。

## ④ ハイダ語の資料の整理

現在のハイダ語が蒙った様々な構造的変化を探るべく、20 世紀初頭になされた、民族学者スワントンによるハイダ語資料(「1. 研究開始当初の背景」参照)の整備を図った。

## ⑤ ハイダ語の保存

「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、ハイダ語は、現在のところ、ごく少数の高齢者しか話せず、その将来に対する見通しは極めて暗い。こうした現状から、現地でもハイダ語教育が行なわれているが、その基本となる学習用の教材の整備が急務である。本研究課題の代表者は、これまでハイダ語教育

に関して言語学の立場から様々な助言を行なってきており、研究課題の最終年度においては、現地のハイダ語教育機関やアルバータ大学のハイダ語研究者と連携しながら、学習者用の辞書を作る基本的な作業を開始した。

## (2) 今後の課題・展望

上述のような成果を得たものの、本研究で残された課題があることも事実である。そのうちのいくつかを以下にあげる。

まず、ハイダ語の統語面に関する理解を一層深める必要がある。例えば、1人称単数動作者格代名詞と3人称代名詞には自立形とクリティック形があるが、その使い分けは、それらが単文の中において現われる位置、関係節や複文における位置、更に情報構造とも関わりがあると見られる。また、複文や関係節における時制の標示の仕方、焦点標識の現われと情報構造の関係など、より多くのテキストを蒐集して解明すべき課題が多く残っているのが現状である。

形態面に関していえば、先に述べたようなハイダ語の動詞複合体にスロットという考え方が当て嵌まるのかという点を一層詳しく検討する必要がある。更に、個々の要素の形態的なふるまい、自立語による分析的表現との関係などについても更なる調査をこなすなくてはならない。

過去になされたハイダ語の研究のうち、特に上述のスワントンによるテキストは、極めて貴重なものであり、今後もその整備を図るつもりである。しかし、その表記を正し、再分析を施すには話者の協力が欠かせないが、スワントンのテキストに現われる語や形態素の中には現在の話者にさえなじみのないものが多く、その再分析は、すでに相当な困難に逢着している。今後もその状況が一層厳しくなることが予想される。

また、現地の関係者と連携を図りつつ、ハイダ語教育と保存に資する最も効果的な方途を引き続き探っていくことも継続的な課題としてあげられる。尚、上述の学習者用の辞書は、今後も取り組んでいく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 堀 博文, ハイダ語の使役について, 北方言語ネットワーク (編)『北方言語研究』第2号: 91~114頁, 北海道大学大学院文学研究科, 査読有, 2012年 (<http://hdl.handle.net/2115/49253>)
- ② 堀 博文, ハイダ語の手段接頭辞について, 北方言語ネットワーク (編)『北方

言語研究』第1号: 1~22頁, 北海道大学大学院文学研究科, 査読有, 2011年 (<http://hdl.handle.net/2115/45227>)

[学会発表] (計1件)

- ① Hirofumi Hori, “Polysynthesis” in Haida. International Workshop on Linguistic Documentation and Description of the North (Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, December 1, 2012)

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

堀 博文 (HORI HIROFUMI)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 10283326

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし